
ある人間の受難記

寺越巧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある人間の受難記

【Nコード】

N3668R

【作者名】

寺越巧

【あらすじ】

いつの間にやら迷子になりました。帰り方はよく分かりません。寧ろ、生きていけるのかもよく分からない、けど意外と人間なんかなるもんだな・・・と思っている人の受難記。（特にそこまで受難でもない）

いち

気がついた時、辺りは森だった。

そりやもう文句の付けようもない位森だったとも。観光客のために整備されたようなものでもなければ畑山でもない。まさしく自然の森。

私、夢遊病か？徘徊癖でもついたのか？と疑うが、明らかに日本の森ではない。というより見たことない樹？やら草やら花やらが盛り沢山。

そして私と言えば、ジャージの上着にジーパン、スニーカー。日本の街中にいる分には在り来りたがどこか分からぬ森の中では明らかに浮きすぎであろう。むしろここ、登山グッズいるんじゃない？というレベルである。コンビニに行こうとしていた身としては財布くらいしか持ち合わせていない。

というより、コンビニに行こうとドアを開けた瞬間からの記憶がない・・・寧ろ直結？いつから私の家のドアはどこでも行けるドア（略しはしない）になったのか。しかも一方通行かよ。後ろを振り返るも自分の家の玄関ではなく果てしなく森。

さて、どうするか。

普通迷子になればその場を動かないが鉄則ではあるが神隠しの何かに巻き込まれたようなこの状況ではまず消極的自殺行為であろう。しかし動くにしてもどこに行けばいいのか分からない。対した装備も食料も持たない以上動いても更なる遭難が待っている。

そっと座り込み、地面に耳を付ける。何も聞こえない。当然である。別に私は超人でもなければ特殊な訓練を受けた人間でもない。仕方なく身体を起こそうとするが、すると、音が聞こえた。

水の音とか足音とか、小説なんかである地面に付けたら聞こえる音なら良かったのだが、生憎今回聞こえたのは背後の草がざりとなった音。人であればよい。のだが、聞こえてくるのは荒い息遣い。野生動物か？

ギシリと身体が固まるがギギギと振り向かせる。

そこにいたのは、犬。ここで野犬の類であればやばいことだろう。群れで行動しているだろうし下手をすれば変な病気を持っている。グルグルと唸り声をあげ、血走った目でこちらを見、今にも襲いかからんとしている犬。

目が3つに角があっても犬っていうのかは疑問だが。

「う、わっ！」

ビクリと身体に震えが走り、犬らしきものが突っ込んできた。固まる身体を叱咤し咄嗟に避けるも直ぐさま立ち直って再びこちらを狙って来やがる。額から突き出る角がメインらしく頭を突き出すように体当たりしようしてくるので転ぶように避ける。パニック状態に陥っていた私だったが、何度目かの体当たりの時、身体が勝手に動いた。

ぐるんと宙を回った犬もどきを地面にたたき付け、仰向けの状態で抑えつける。こう聞くとまるで私がどこかの小説みたくな突然力が湧いたとかチートな力を付与されたと勘違いされるかもしれないが、残念ながらこれは単なる反射と反復である。

過去学生時代は柔道に明け暮れ青春を費やした人種であったため、たまにその時の記憶が身体を動かす。とはいっても今まで役に立ったのは自転車で派手にすっころんだ際に受け身を取り傷一つなかった時くらいだ。

それはともかく、犬もどきだ。寝技の要領で地面に押さえ込み、首

を足で圧迫。やがて犬もどきは動かなくなった。落ちた。一応こう見えてまともな動物であつたらしく、首筋にちゃんと頸動脈があり、さらに絞めて落とせたようだ。・・・死んでね？

まあ相手は獰猛で見た目変だが犬である。マジな人間の力なら簡単に骨も折れるし圧迫死させられるだろう。初めて生き物を殺した身としては罪悪感に苛まれたりするものなのかもしれないが、それ以前に驚くことが起きた。

犬もどきが消えたのである。逃げたとかそんなものではなく、文字通り、解けるように消えた。

しかも、その後には何故かコインと角。

え、これなんてRPGですか？

とりあえず角を片手にその場から離れる。犬もどきのモンスター？である以上、習性的に近くに群れがいる可能性もあるからだ。

のちの生活の糧になるであろうコインはしっかりと財布に突っ込んだ。お金は大事だね。

その後宛てもなく歩き続けてみるが、全く人や森の出口にはぶち当たらない。やっぱ本格的にやばいのか。やたらと犬もどきや草もどきやその他もろもろに襲われるし。

あ、でも先程言った言葉は訂正しとく。なんか身体能力上がってるようだ。正確には重力が地球の半分とかそんな感じ。いや、だって私、確かに柔道とかやってたけど、そんなの高校の時だけで大学は思いつ切り引きこもりしてたし。

だらけきった生活により体力は減り筋力は少なくなり当時ですら重量級であつた身体はどんどん体重を増やし締まりをなくした。今や〇〇キロを誇る私の身体が、軽い。

これだけ歩き回っているのに疲れない。（いや流石に休憩をいれて

いるので一概に言えないが)

試しに石というか岩を持ち上げてみる。多少重いが持ち上がらない事はない。

ジャンプすると60cmくらい上がる。いや、意外と人間単にジャンプしただけじゃ30cmくらいしか上がらないから。低いとか言わないそこ。という訳でこの世界、というか星は地球の重力の半位置と仮定。身体能力強化やチートな力を付与された訳ではないのだから一般より能力が高くなっている可能性がある。いや他の人間も相応の能力である可能性もあるけど・・・むしろこの星に人間は存在するのか。そこが問題の気がしてきた。いたとしても重力半分だしめっちゃくちや細長くて背の高いのとかだったら・・・十分有り得るから何も言うまい。

自分のこの星への適応性を心配しつつ、以外と犬もどきや草もどきを退治しながらコインや素材?を着々と集めている辺り心配は不要な気がしてきた。

まあ、一番の心配と言えばさっきからぐうぐうとなる腹だろうか。お腹すいた。そもそもコンビニにご飯を買いに行くはずだったのだ。あれから半日以上。当然お腹はすく。今まであまりにも突然の展開に麻痺していたが一度自覚すると堪えがたいものがある。

しかし、私が食べられるものは存在するのか。今現在息も出来ているし重力以外に不調らしきものもないあたり、この星の環境は地球と似た大気や環境と思われるし、犬もどきを見る限り哺乳類も存在しそうである。(最後に消えてコインになる辺りは理解出来ないが)となれば私が食べられるものもあるとは思うが、もしかすると毒になるものかもしれない。身体の構造が同じとは限らないからである。考えていると、正しく目の前に、私の知っている林檎に似た果物。・・・・これ食べるんだろうか。とりあえず犬もどきを捕まえると鬼畜ばりに口の中に突っ込んでみた。無理矢理飲み込ませ様子を見るが、私の腕から逃げようともがくだけで変化は見られない。ん、食べられそうだ。

しゃくり、とみずみずしい音を立ててるかじるとじわりと甘い果汁が。林檎だ。食べるものも一応一種類は確保出来た。犬もどきどもも初めての邂逅以後は割と簡単に倒せている。気温も暑すぎず寒すぎず野宿も出来そうだ。

できる限り野宿は避けたいが、意外とこの生活何とかなりそうである。

というわけで、取り合えずの生活を確保出来た私の目標は人間発見になりそうだ。宇宙人でないことを祈る。

に

翌日、私は木の上にて目を覚ました。

犬もどきや植物もどき、まあまとめて言えばモンスターの襲撃を恐れた為だ。一匹一匹の力はそこまで強くないものの、複数でも出てくる上に出会う頻度も高い。

こんな状態で何の対策も取らずに寝てなんていられない。

かといってサバイバルの知識がある訳でもないので取り合えず木の上で休む事にしたのだ。

よく小説なんかでは火を焚いたりして野宿をしているがライターやマッチの一つも持たない私に火をおこす術なぞあるはずもなく、また周囲に罠を仕掛けるなんて事も出来るはずがない。

今まで出くわしたモンスターは全て地を這うものばかりであったし木の上なら少しは安心できると思ったのだ。

猛獣よけに木の上で寝る、なんて事もベタな展開ではあるとも思っただが、鳥もどきや虫もどきなんて奴らもいたら間違いくもつと別の場所を探したとも。

それに重力が軽くなった分木登りも容易く行えるようになったということもある。

小さい頃は学校や裏山に生える楠やドングリの木に友達と登っていたが体重と年齢の為十年は登っていなかった分妙に感動した。

だが十分に太い木に登ったものの、ある程度の高さとなると幹も枝も心もとなくなっていく。

一応それなりの高さかつ太い枝に腰を落ち着けたものの無防備に寝たら落っこちそうだ。

ここが安全だと絶対の自身を持って言えない以上、ぐっすり安眠な

んて出来ないな、と苦笑したのが昨日。

予想以上に疲れていたのかいつのまにかうとうとからぐっすりにと眠っていたようだ。

人間って図太い生き物だな。木に登った時には暗くて気づかなかったが、この木から少し離れたところに沢が見える。顔も洗いたいしまずはそこに向かってみよう。

ずりずりと木から降りると昨日寝る前に放りだしたものが転がっていた。

元は財布のみの文字通り着の身着のままであったが、昨日モンスターを倒して手に入れたコインや角や毛皮などの素材らしきもの、である。

植物もどきも実や葉っぱを残していったが、こちらは食べれるのかもどう使用すればいいのか分からなかったのもその場に放置。他の加工がなんとかできそうなものだけを持ってきたのだがいかんせん嵩張る。

昨日はコインはジージャンのポケットに、素材はジャージを袋っぽくして持ち歩いていたのだが夜羽織る為に中身を地面にぶちまけていたのだ。

今日もこれを持ち歩くのかとためらい、それも嫌だなと基本的に1種類につき一つだけ持っていく事にして他は木の根っこの所に固めて置いていく。

袋もない以上荷物は余り持てないのだ。それと同じく昨日とついていた林檎を四つばかりジャージに包み、一つは歩きながら食べる事にした。

少し長めの角をまるで棍棒代わりに片手に持ちさくさくと草をかきわけ進む。

途中植物もどきにあったがこいつらは特に動きも速くないのでスルーした。

犬もどきと違ってこちらが近づいて鳶の届く範囲にいかねければ問

沢につくと水に手を入れてみた。澄んだ水は痺れるように冷たく、深さ自体は余りないがちらほらと小魚も泳いでいるので特に飲んで支障もなさそうに見える。

昨日から林檎で水分も取っていたとはいえ、久しぶりの水分にほと息をつく。ある程度のどを潤すように水を飲み、続いて顔を洗う。冷たい水が気持ちいいが、当然石けんもなく化粧水や乳液もない。化粧はしていなかったのでもまだよかったが、これは直に肌が荒れるなどと思い、そんな事を考えている余裕があるのかと笑いたくなつた。

泳ぐ小魚をみて一瞬捕まえて食べようかとも考えたが、火もない状況、川魚を生で食べる気も起きず、また道具もなしに魚をとれるかと聞かれると無理だと応える地元は田舎だがそれでも現代っ子である。

今後の林檎生活に若干怯えつつ、林檎もそんなに量がないし、幸いにも沢を見つける事が出来たので、水の心配はなくなった。

9

存在していなければ話は別だが。

半日ほど沢沿いに移動してくといくつかの沢や湧き水と合流し、大きな川へと変わっていく。それに併せて周囲も開けていくのでどんどん歩きやすくなっていく。

これは望みありだなと考える。モンスターとの遭遇頻度も目に見えて少なくなっている事からもこの分だとすぐに集落が見えてくるのではないかと期待した。

まあ、甘い見通しだったわな。川になってからの変化は乏しく、この日は結局ある程度進んで川のほとりで休む事にした。

モンスターはいるものの地球と生態系はそれほど変わらないように木いちごも近くに生えていたため林檎と一緒にそれも口に含む。

歩き疲れて毒がないか確認するのも億劫になったがまあこの量なら死にはしないだろう。

林檎と木いちごって時期一緒だっけという疑問が残らないでもないが安心して口に出来そうなものが少ないため細かい事は気にしない。とんだダイエットだなと少し緩くなったベルトを締める。

そうして少しお腹も満たされた事だしとまたいそいそと木に登る。取り合えず今日は寝よう。明日の事は明日考える。

さん

その後、2日ほど川沿いを延々と歩き続けた。

モンスターとの遭遇は日に2度、3度程度とはなったが、いかにせんお腹が減った。

人間水と果物だけじゃ生きていけないよ。これだけ歩いても人っ子一人出会さないとすると、これは本気で人間存在否定説が有力になってくるんじゃないか。

そうは言っても他に宛てもなく、かといって森の中へとカムバックもご遠慮願いたい。

そうだなったら平野に出たら自分の王国を打ち立てよう。悠々自適の時給自足生活。は、素晴らしいじゃないか。種も苗も道具も家もありますね。

そんな考えに脳みそが占領されていたが、気づけば川沿いが若干補強されているのに気づいた。

王国とか超恥ずかしい。数分前の自分をぶん殴ってやりたい。だがそれは置いておこう。

問題は第一村人を発見する事である。川を少しいったところに畑がありその向こうには小さな集落らしきものが見える。

オーケー、ビンゴだ。私の読みは正しかった。栽培されているのが麦らしいのも、宇宙人（グレイとか火星人）でなく同じ人間である可能性が高い気がする。

畑へと近づくとザクザク、と刈入れの音が聞こえた。そちらの方をむくと50代くらいのおじさんが麦わら帽をかぶり、鎌を片手に作業をしていた。人だ。人がいる。

高鳴る鼓動も胸におじさんの方へ。見た感じ欧米系の人種で服は生

成りのシャツとズボン。本当にファンタジーの村人Aのような格好だと思いつつ声をかけようとして気づいた。

なんて声かける？少なくとも日本語は駄目な気がする。英語か？だがそれは地球なら通じるだろうがここでも通じるのか？そもそも私は英語なんてまるっきり駄目だ。

点は取れるがヒアリングは不得意である。洋楽を片言で歌いきる人種である。そうこう考えているうちにおじさんも私の事に気づいたのか作業を止めて声をかけてきた。

「XXXXXXXXX？XXXXXXXXX、XXXXXXXXXXXXXXXXX」

全く分らん。おたおたしているとおじさんが鎌を置き、刈り取った麦を一所にまとめて村の方へと向かう。

こいこいと手招きしていることから来いといっているのが分かる。おじさんの後をひよこひよこついていくと村の中に入る。

30軒から40軒ほどだろうか、ログハウス風の家が並んでいる。農作業に出ているのだろうか、それほど人は多くないがぼつりぼつりと女の人が家事をしているのが伺える。

その中の一軒に入るとおじさんは大きな声で呼びかける。奥からパタパタと同じ位のおばさんが現れ、私を見るなり目を見開いておじさんと何か話している。そして再びおばさんが奥にいくと椅子に座らされおじさんも奥へ。

え、放置ですか。所在なく家の中をきょろきょろと見回すが、食堂兼居間になっているのだろう、テーブルと椅子、暖炉には暖かく火がともされ棚にはいろいろな道具が詰め込まれている。電気のたぐいは見受けられないが、ガラス製のランプがある事に気づいた。

勿論中に油と火種を入れての原始的なものではあるが、ガラスの加工技術があるという事はそこそこに発展しているに違いない。

ここが単なる田舎で電気が通っていない可能性もある。

あれだけモンスターと遭遇しながら、未だにここが海外で実は旅行中に記憶喪失になったとかいう落ちを期待している。

全く我ながらポジティブな考えだなと思考に浸っているとおじさんが何かを抱えて戻ってきた。

と、バサリと手に持っていたものを頭からかぶせられた。

何だ。

実は人さらいでしたとかいう落ちは期待してないぞ。このままぐるぐる巻きにされるとかシャレにならん。どうにか頭を出すとそれが毛布である事に気づいた。そして他におじさんが持っていたものが包帯や薬のようなものであったのを見て自分が恥ずかしくなった。確かにモンスターとの戦いであっちこっちに傷を作っているがそれだけで見ず知らずの他人を家に上げてくれて、手当してくれようというのか。そんな人をわずかにでも疑うとは。

しかも手当をしてもらった後、戻ってきたお婆さんの手には温かなシチューとパン。数日果物と水だけで過ごした身にしてみればもうそれだけでご馳走に見える。

ここでの作法が分からなかったのでおじさんとお婆さんに深く頭を下げた後手を合わせて頂きますと心の中で呟いた。涙が出るほどおいしかったとも。

そうして食事を平らげた後、もう一度深く二人に頭を下げると二人とも苦笑していた。

言葉がわからないのでとりあえず身振り手振りで森の方からきたと

伝えると二人とも痛ましそうな顔をした。

声も出しながらだったので恐ろしい目にあって声が出せない状態になっていくという訳ではない事は分かってくれていると思うが、そこを気にする様子がない辺り、言語は複数あるように推測される。かと言って全く言葉の分からない人間が突然村に現れたりするだろうか？現代のように観光目的の旅行が頻繁に行われているならともかくそれは無いように思われる。

それに日本のように完全な島国ならともかく普通言語なんて近い国なら似通ってくるもんじゃないのか？

・・・いや、そうかここが島国でいろいろな国と貿易しているなら多少はあり得るのか。

どう見ても港町には見えないが、商人なら多少足を伸ばしたりするのかもしれない。いずれにせよ不審に思われる事がないのならこちらとしては大助かりだ。

そんな思考に捕われているとおばさんと話していたおじさんがこちらに話しかけてきた。

言葉が通じないことは分かっているのかポンポンと私の肩をたたき、奥の方を示す。おそらく休んでいくといいというニュアンスの事なのだろう。私はありがたくこの申し出を受けることにした。

警戒心なんてものはない。田舎というものは総じてこういうものだと言う私の認識もあるのだろうが、悪意なんてものは全く感じられない。

ただ人を心配する、その気遣いだけが向けられているのだ。

その事に安堵しつつおばさんに部屋へと案内される。おじさんはというと、中断していた農作業に戻るのか再び外へと出て行った。

そういえば収穫した麦なんかも置き去りだった。

その事に申し訳なさを感じつつここ数日の緊張感が途切れたせいか

疲れを感じる身体を必死に動かす。

おぼさんが案内してくれた部屋はそれほど大きくはなかったが、ちゃんとベッドと机、タンスなんかがあるものの、しばらく使っていないさそうな部屋だった。

ふらふらとベッドに近づくと倒れ込むように横になる。もそもそと靴を脱ぎベッドの外へと放り出す。

おぼさんがわざわざシーツを新しいものと交換してくれたらしい、埃っぽさもないベッドは、敷き詰められた干し草と太陽の匂いがした。

よくわからない星だか世界に飛ばされた人間だけど、こういう何でもないところで懐かしさを感じられるのは涙が出るとほっとする。

なんだかアルプスの少女のような干し草のベッドに包まれながら安心して眠りについた。まだ日も暮れてないけど。

よん

まだ朝靄のかかる夜明け前私はぽっかりと目を覚ました。

すぐさま二度寝をしそうになる脳を覚醒させるべく勢いよく上半身を起こすと、掛け布団をはねのけ立ち上がる。

足首まである頭からかぶるだけの寝間着をベッドの上に適当に畳んで放り出すと脇に掛けてあるズボンを手に取り着替える。上は生成のシャツを羽織り布製の靴に足を通した。

あまり物音を立てないように部屋を出ると家の裏手にある洗い場いき、水瓶の中から水を一掬いし口をすすぐ。続いて桶に水を汲むと顔を洗い、もってきた手ぬぐいで顔を拭うと、水を静かに排水用の穴に流し入れて玄関脇に置いてある棒を持ちそつと家を出た。

簡単な身支度を整えてもなお薄暗い村の中を通り、広場へと向かう。そこにはすでに2人の男が待っていた。

軽く手を挙げての挨拶もそこに三人で森の方へと歩き出す。前を歩く二人は時たま言葉を交わしているようだったが、ほとんど聞き取れない私は二人の後を黙々について歩く。

稲が刈り取られ見晴らしの良い景色になった畑を過ぎ、もうじき森へと入ろうか、というところで立ち止まる。そこで二人の男のうち年配の男が若い方に茂みを指さす。若い男が足下にある石ころを拾い森の中へと投げつけると一拍、茂みから犬もどきが飛び出してきた。

ご丁寧にも近くにいた男二人ではなく直線上にいたらしい私目に向けてだ。しかしこの犬もどきをいぶり出す為の行為であった為私も驚くことはなく、手に持っていた棒ーといっても木ではなく鉄だがーを思いっきり振りかざした。

振り切ったところでジャストミートした犬もどきはごろごろと転がり動かなくなった。コインになったところで手早く次の場所へ。年配の男は犬もどきの習性を熟知しているのか森の近くをうろつい

ては若い男に指示したり時には私にもその役を回してくる。そうやって順調に辺りのモンスターを片づけたあたりでやっと日のお目見えだ。年配の男が辺りをぐるりと見やって朝の仕事は終わりである。拾ったコインは三人で分け、それぞれの家路につく。

これは村人の何人かが請け負っている仕事で、簡単にいうと自警団のようなものである。

村の畑近くにモンスターの現れる森がある以上、ある程度の被害があるらしい。そこで村の若い人間がある程度集団で朝方や夜に見回りをしているのだ。

年配の男は、どちらかというところと戦力というよりも指南役といったところか。

慣れてくると同じ年頃の若者同士で組んだりするようだが、私やもう一人の青年はまだ慣れていないということで年配の人と組むことが多い。

私たちもそれなりに戦えるようになれば友人たちと組めるのだが、まだ私には友人と呼べる人間はいない。そもそも意志疎通もなかなかいかないのだから無理もないだろうが。

そもそも何故私がこんなことをしているのか。

もちろん小遣い稼ぎということもあるが（見回り自体は完全なボランティアだが、倒した分は山分けなのだ）これはそもそもこの村にたどり着いた次の日に遡る。

久しぶりに屋根と布団のある眠りについた私は、一宿一飯のお礼と出来れば暫くおいて欲しい、という交渉をすべく、自身の持つコインや素材の一部をおじさんとおばさんに差し出した。コインは白と銅のタイプだ。モンスターを倒すと白のコインが多く得られ、たまに銅のコインが得られたのでおそらく銅の方が価値は高いだろう。どの道貨幣価値もわからないし自分で持っただけでもすぐには役に立たなさそうである。

しかし全て渡すのもどうかと思われたので半分は手元に残す。素材は全て渡した。使い道もわからなければ売る交渉も無理だろうし。するとおじさんがいくつか訪ねてきたのだが当然答えることも出来ず。そうするとおじさんはコインと素材を別々の袋に入れて外へ。ついてこいとジェスチャーで呼ばれたので一緒についていく。

町中を歩いていきながら周りを見回すと、木で出来た家が40軒ほど。中には雑貨屋のようなものや鍛冶屋のような物も見受けられる。地面は踏み固められた土。煉瓦のような物は見られない。

すでに男たちは農作業に出かけたのかあまり姿を見かけないが、その分女たちが家事をしたり機織りや籠編みをしていた。

物珍しさにきよろきよろしながらおじさんの後を追うと、一つのお店に着いた。ほかの店に比べて少し小さめの建物に、外面式のカウンターがあり、そこにはおばあさん。見た目はそう、魔女とか占い師みたいな感じにフードを被っているのだが、目をつむつてのんびりしている様子からなんだか昔ながらのたばこ屋みたいである。もしや臨時収入が入ったからたばこを買いにきたのか？

おじさんはおばあさんに話しかけると私を手招きする。カウンターの近くにいくとどうやらおじさんは私の紹介をしているらしい。名前を聞かれているようなので答えるが、どうやらこの人にとっては発音しづらかったようでトウと呼ばれることになった。

後で気づいたが姓でなく名前を名乗るべきだったかと思う。いや、会社の時の癖で姓で名のつちやっただよ。

ここはどうか分からないが姓が存在、または平民に広まっているのかという問題もあるのだが、まあ姓しか名乗ってないし名前と間違えうだろ。必要ならば良いだけだし。

そしておばあさんの手振りに従って水晶に手を当てたり額やらを触られたりしていると、硬いがプラスチックとは違った感触のカードらしき物が渡された。そしておじさんがコインや素材の袋を渡すとおばあさんが数え出す。どうやらここは交換所らしい。じゃあこのカードは何かを登録したものなのか。ひょっとすると身分

証なのかもしれない。表面に文字らしき模様が見て取れるし。

そうして最終的にはいくらかのお金らしき物と交換された。それはそのまま私に渡されたのでおじさんに突き返そうとしたが頑なに受け取らない。

何故だ。困っている人間からはお金はとらないということか。おじさんいい人過ぎるだろ。

とりあえず中身を拝見。中身はさっきのコイン・・・？いや、質感は同じだが、あちらは表面がつるりとしていたのに対し、こちらはきちんと模様が入っている。どうやら貨幣として使うにはこれでない駄目なようだ。

じやらりと硬質な音をさせる袋をとりあえず懷に納めると、お婆あさんと話し終えたおじさんが次にいくぞと言わんばかりに歩いてく。

次に来たのはさつき通り過ぎた鍛冶屋の用である。どうやら鍛冶仕事をしているのは裏手で、表は武器屋のようだった。

さあ選べと言わんばかりのおじさんに驚いたのは私である。

え、武器を買えと？剣や槍の置いてある店内を見回すが、こちらら平成の人間である。

剣道もかじったことはあるが基本武器を持つことなんてない。刃物なんて危ないじゃんスプラッタだよ。

そして気づいた。これはもしやおじさん私がそういう生業の人間だと思っっているんじゃない。コインや素材はモンスターを倒さないと手に入れないんなら十分ありうる。

やばい、確かに苦戦していた訳ではないが、出来ればそういう筋のお仕事はご遠慮願いた・・・駄目ですか。

分かった選べばいいんでしょーと投げやりになるも、どうするか。武器なんてホント使えないのに。せいぜい棒でぶったたくしかない。槍？でもそもそもこれは突く武器だ。剣。さっきの意見で却下。弓。使えません。斧。剣と同じ理由。と、一本の鉄の棒を発見。これっ

て武器か？細長い鉄製らしき棒だ。これならある程度条件にはまるのではないか？いや待て、これってそもそも武器か？おじさんやお店の人も首をひねっている。お店の人もとうことは違うのか？とりあえず持つていくとエーシラナユートニスラだそうだ。

武器の名前か？と思ったがおじさんが袋を出せというジェスチャーをするので渡すと銅のコインを5枚と白のコインを8枚渡す。どうやらお金のことだったらしい。

どこまでが数字でどこからが単位ですか？

さて、その日はそのまま家に戻り、おじさんは畑へ私はお婆さんの手伝いをした。

どうやら武器があるからと追い出されることなくここに置いてもらえるらしいと安堵したのだが、次の日、日も出ぬ内からおじさんに叩き起こされると鉄の棒を持って広場に。

そこには何人かの男の人。そのまま朝の見回りに同行させられ、5日ほど別々のメンツと見回りにいく日が続いた。

どうやら顔見せだったらしく、その後は2、3日に一回という頻度で参加している。

参加するメンツはその日によって違うが、ある程度バランスがとられていることが分かった。大体は年配の人と若い人の2人組だったり3人組の青年だったりの人数である。基本のメンバーに私がプラス。もしかして私が一番行っている頻度高くないか？

そんな訳で今日も私は朝からモンスター退治に精を出していたのであった。

その後もおじさんの農作業の手伝いやお婆さんの家事の手伝いがあるので夜にはクタクタである。こうして私のここでの生活が過ぎていくのである。

こ

この村はどこをどう見ても田舎の農村ではあるが、各家にランプがあつたりこの村で作っているとは思えないようなものが沢山存在する。

ならばこれらはどこから来るのか。

話は簡単なこと。

定期的にこの村にやってくる行商人から購入しているのだ。

どうやらこの村、交易路の途中にあるらしく何度も同じキャラバンが行き来するのを見かける。

ただ、新しい顔ぶれを見ることはないのであまり活発な交易路ではないのかもしれない。

しかもこの村に続く道は小さな馬車が一台通れる程度の幅であることを見てもそれは見て取れる。

おそらくほかに大きな道もあるのだろう。

ここを通るのが近道だとしても馬車一台通るのがやつの道が栄えるとは思えないので、おそらくここに来る行商人はこの村を主に取引しているのかもしれない。

1〜2週間おきに訪れる彼らもたらすのはこの村だけでは手に入らないような雑貨などがメインで、彼らが来る日は広場にて即席の市が開かれるが、その後は商品を道具屋に卸して村人が買うという形をとっているようだ。

ともあれ、そんな市も私が来てから20回以上も過ぎ、行商人の中にも顔見知りというものが出来たのである。

目の前にはピコピコと動く耳。黒々と光るつぶらな瞳。全身を覆う短めの茶色い毛。ふさふさとしたしっぽはゆらゆらと揺れている。

「トウ、どした？」

「気にする、な」

どう見ても犬が二足歩行しているようにしか見えねえ。

最初の頃は、市が開かれても遠くから見ているだけだった。

話かけるにも言葉が通じないし、そもそもそこまでお金に余裕があるかと言われれば否と言うしかなかった。

今でこそ定期的にある程度の収入があることが分かっているが、何にどれくらいのお金が必要なのか、収入がいくらくらいなのかも分からなかったからな。

余計なものをくらいならおじさんとおばさんに食費を入れる方が先である。

が、ある程度すれば貨幣価値や収入の度合いも分かってくると言うもので。

何か買うわけでもなくとも冷やかしかけてもと市を覗いてみたのだ。

古今東西、買い物嫌いな女子はまあいない。

私もその例に漏れず、学生時代などはウインドーショッピングをしたものだ。

・・・まあ、ほぼ見ているだけだったが。

社会人になってもそれほどお金に余裕があるはずもなく、休日なんて疲れて家で転がっているのが普通になっていたからなあ。

そんな訳でふらふらと市をふらつく。といっても、露天が4つ5つ出ているだけなのだが。

けれどそれでも毎回出る商品も違えばわくわく度は違うのか、村人のほとんどがこの一日か二日の市を楽しみにしている為、人は多い。人混みというほどではないが、なかなかのにぎわいを見せるのだ。軽く物見のつもりで来てみたが、これがついつい楽しくてがつつり見てしまった。

これで言葉が通じていたらおっさんのセールストークに負けて買っていたところだろう。

衝動買いはいつだって女（のお財布）の敵だ。

おっさんのセールスに負けたらしい奥さんが何か買ったようだ。

おっさんが裏の方で作業している人間に声をかけている。

品物を持ってくるように行っているのかもしれない。

簡単な布の幌で出来た露天の裏から小さな子供が出てきた。

もちろんこの世界では子供だって労働力だ。若者が少ないこの村だって何人かは子供がいるが、その全員が農作業のお手伝いをする。

が、出てきたのは子供なのか私には判断つきかねた。

出てきたのは犬の獣人だったのだ。

この世界はどうやらファンタジーな世界の例に漏れず、様々な種族がいるらしい。

らしい、というのは実際に見たことがあるのは彼のような犬の獣人や猫の獣人、エルフだけだったからだ。

まあ、地球に比べりゃ多いよな。

それだって遠くから見ただけなのだし。

その獣人はこちらを一度見てキョトンとした。

おっさんに呼ばれて慌てて仕事に戻ったが、その後もちらちら見られていたのを覚えている。

まあその気持ちも分からんでもないが。

どうやらこの国、というか世界？では黒目黒髪というのが珍しいらしい。

珍しいというだけで全く存在しないわけではなく、忌避されたり迫害を受けている訳ではないのは村人の様子を見るに明らかである。

大人はある程度見たことがあるのか対して反応はないがたまに子供にまじまじ見られることはある。

ということはあの獣人も子供なのかもしれない。

そういうことがあってから何度か、あの獣人を見るようになった。

その度見つめられるのは少々頂けないが。

だが、ある時、ついに獣人からのファーストコンタクトが！

まさか話をしたことがないにも関わらず鳩尾タツクルを食らうとは思わなかったよ。

もの凄いしっぽのふりに、私はお前の飼い主じゃないぞと日本語で怒鳴ってしまったのは記憶に新しい。

おそらくニミナと名乗っているだろう獣人との邂逅はこれを皮切りに毎度来る度にタツクルを食らうというセオリーが会話というコミュニケーションが出来るまで続いたのはいうまでもない。

というか今日もやられたので実のところ未だ達成出来ていないのだが。

そんなニミナに毎回たどたどしい言語で止めろと行っているのだが、聞きやしない。

「ニミナ、痛い、ので、止めろ」

「トウ、どこか痛いのか？大変だ！薬いるか？」

「いない」

「そうか？」

しっぽを振ったり、耳を伏せてしょんぼりしたり忙しいな。

流石に大人げなかったか。

コミュニケーション力の不足は私の言語力にあるのに、意味が通じないことに怒るのは子供に対してひどいよな。よしよしと奴の頭をかいぐりかいぐりしてやる。耳がピンと立った。よしよし、これでもいいだろう。

「トウ！トウ！今日はどうしようか！」

「ニミナ、仕事はどう、した？働け」

「今日は終わりだよ。トウと遊ぶ！」

「本を読み、たい、から、嫌だ」

どうも接続詞や疑問になるとスラスラといかない。意味は通じているからおかしいということはないんだだろうが。

「なら俺が読む！トウ、まだ分からないんだろう？」

「んゝ、分かった。頼む」

この世界は識字率はあまり高くないが、ニミナは商人になるべく、色々と勉強しているらしいので私が読もうとしている幼児向けの本

なら簡単に読める。私も絵のない絵本（もはや絵本とは言わない）を何の手がかりもなく解読するよりは読み聞かせで覚える方が都合はいい。都合はいいのだが、なんか絵面的に納得がいかないのは私だけだろうか。

こうして私は少しずつ、この世界を知っていく。

ろく

「あ」

ぐにやりと真ん中からへしやげた鉄の棒。

私の武器である。

いつもの朝の恒例行事の時のこと、特に何てない日だった。別に特別強いモンスターが出た訳ではなく、相手は植物もどき。木のうろが人面を模ったモンスターで、いつもの如くホームラン出るとばかりにバットののように振りかぶった。

本来なら鉄対木、ミシリと木が碎ける感触を味わう事が出来るのだがこの時感じたのは鈍い衝撃。植物もどきは吹っ飛んだが、私の武器はこの様だ。

おそらく耐久度を越えたんだろう。下手をすれば折れて破片が飛んできていた所だ。

それを思えばまだましかと思いつながらそのまま攻撃。曲がった所で単なる鈍器としてしか使っていない為問題ない。

しかし、やはりリーチが無いのは厳しいだろう。正直殴りにくいし。お金にも余裕が出てきたし、鍛え直すなり買い直すのもありだろう。

そう考えながら今日の朝の仕事をこなしていく。

今日の朝ご飯はなんだろうな。取り合えず一番気にかかるのはそちらです。

家の扉を開くとかちやかちやと食器の音がする。

どうやらおじさんとお婆さんは既に食べ終わったようだ。農家の朝は基本的に早く、朝のモンスター退治が早く終わったとしても既に

食べはじめているためこれが通常の事なのだが、一応遅れた事を詫
びて席につく。

食事を出してくれるおばさんに礼を言って食べはじめる。

おばさんも色々忙しいので、食べ終わったら食器の片付けも私の仕
事だ。

別に避けられているわけではなく単に時間が合わないだけなので悪
しからず。

朝行かない日はいっしょだよ。

少し固い全粒粉のパンを昨日の残りで作った野菜スープに浸しながら、近くで採れるベリー系の味のする果物のジュースで喉を潤す。
朝は牛乳を一杯派であるがこの村自体に乳牛がないのでそこは妥
協するしかない。

運が良ければ市に行けば飲めることもあるが、基本的にはチーズの
ような加工品がメインであるため、余り需要がないようでも朝に
飲むのは無理である。

まあ、色々加工品の技術はあるのか、ハムやベーコンのような肉類
やピクルスやまあ漬物、味噌や醤油に似た調味料もある為食に乏し
いと言う事が無いのが救いか。

鶏を飼っている家もあるのでたまに目玉焼きが食卓に上ることだっ
てある。

甘いものだって砂糖が中世ほど高価なものでは無いためそれなりに
出回っている。勿論焼菓子もメインで日持ちする食べ物としても
重宝されている。

ありがたい限りである。

朝の食事を終えて一息ついた私は次に農作業に精を出す。この間小
麦の収穫が終わったので次の種蒔きに向けて畑を耕さなくてはいい
けない。

この辺りは年を通じて温暖な気候の為二期作や二毛作が盛んだ。そ

の分畑を休ませる期間が短い為、耕して肥料をやるこの時期に手を抜いてはいられない。

鍬を手にザックザックと耕し、ある程度いくと肥料をまきながら混ぜ込んでいく。それを繰り返しながら広大な畑のほんの一部を作り替えていく。トラクターとかそういう機械所か牛を使った農耕機具もない。食品加工技術の向上もよろしいが、そういった技術も開発してほしい所だ。

額に汗して一区画を終えると日が頂点に差し掛かる頃になる。

ふう、と一息ついて脇道に腰掛けるとおばさん特製サンドイッチをほうばった。ハムとレタスのサンドイッチだが、何故かマヨネーズがない。マヨがないだなんてなんてサンドイッチだ。いや、そこまです卵も多くないから調味料として使うという発想がないんだろう。私が作ってもいいが、作ったことがないので正確な分量も作り方もわからない以上挑戦するのは躊躇われる。

ああ、マヨネーズが恋しい。

お昼を食べ切ると立ち上がりパタパタとお尻から土を叩き落とす。お昼休憩はもう少し取っても構わないのだ。というか、一番日の高い時間は皆農作業の手を止めて日影で休むのだ。シエスタっぽい。というわけでこの時間を利用して鍛冶屋を覗く事にした。

家から持ち出していた曲がった武器を片手にブーメランのごとく回ると指の周りで回しながら村への道に行く。村の人は大概農家な為、村の外に広大な畑が延々と広がっているのだ。畑から村へ移動するのもそれなりに時間がかかる。

大体20分くらいか。

因みに軽くなった身体でこれなので、一般の人が歩くと1.5倍くらいかかる。まあ私が早歩きなのもあるかもしれないが。

かんかん音のするあたり、今は仕事中的ようだ。叩いていなければ鍛冶場に直接声をかけるが流石に今行くのは邪魔だろう。という

か確実に気づかれないうらな。

鍛冶場からくりと家の横を通り、表へとでる。こちら側は武器屋だ。親子でお店をしているらしく、父親が打ち息子が売っている。なのでどの道どちらに声をかけても変わらないと言えは変わらないのだが、どちらかという商人な息子より職人気質な親父さんの方が親しみを持てるというくらいか。

「よう、トウ。今日はえらく早いな。」

「単に昼休みだ」

「ふん、そうやってわざわざあんな一番遠い畑から戻ってくるたあご苦労なこったな」

「大した距離ではない」

まあ、体力勝負である農作業で昼間に休憩せずにフラフラと町まで歩いて来るなんて普通はしないだろうが。

「で、今日はどうしたんだ？」

私は手でぶらぶらさせていた棒をカウンターの上に置いた。それを手に取り武器屋の親父（ちなみに鍛冶屋の息子ではあるが鍛冶の親父さんもう60越えなので当然息子も40を過ぎて幾ばくかの親父である。）はしげしげと眺める。手で曲げようとしてみたり、ガンガンと机に叩きつけている。ああ、さらに曲がったらどうしてくれるんだ。「これはまた・・・どうすりやここまで見事に曲がるんだ。ここまで来ると親父でも直すのは難しいかもしれんなあ。」

「そうなのか？」

「ああ、この分じゃ打ち直してまっすぐにしてもすぐに折れちゃう。 casting 直すか新しく買った方がいいかもしれん。」

「そうか・・・ちなみに何かいいものはあるか？」

武器屋の中を見回すが、やはり剣や斧、槍、弓など一般的な物しか見あたらない。

「ふむ、お前さんのこいつは物干しざおだったんだがみたところ殴るのにしか使ってないだろ」

ええ、それしか出来ませんから。柔道なんかもやってはいたが人間相手。モンスターと戦う術なんぞ持っていない。

てか物干しざお！？物干しざおだったというのかこの棒！？

「同じのも用意出来ないことはないが・・・これなんてどうだ？」

そういつて親父が取り出してきたのは、大きなトンカチだった。

「トンカチで戦うのか？」

「トンカ・・・まあいいか。こいつは”テチスクチモイス”だ。」

テチスクチモイス・・・呼びにくい。ニュアンス的には鎚、もしくはハンマーにでもしとくか。覚えた単語以外の専門用語がでるとなかなか難しい。

「殴るに特化した武器だ。お前さんのスタイルにもまあ合うだろう。」

「値段は？」

「大体ヨーノナスくらいだ」

「・・・高い」

棒の15倍位である。いくらなんでも高過ぎる。モンスター退治1ヶ月分である。いや、むしろ棒・・・物干しざおが安すぎたのか。そりゃそうか。武器じゃなくて日用品じゃねえか。なぜ置いてたし。

「大体そんなもんだ。まあ、お前さんは朝の勤めも励んでいるからな。ユーノナスラにマケといてやるよ。」

ちらりと財布の中身を覗く。・・・足りるな。しかし、これ買ったら無一文だ。うう。

「買った。」

「毎度ありー」

こうして私はこの先長くその命を預けていく武器を手に入れたのだ。

なな

ごそごそとタンスを探る。何枚かのシャツとズボンを取り出し小さく折り畳んで油紙に包み、麻の紐で縛る。

下着？その辺は企業秘密である。いやまあ隠すほどのことではないが気に入るものがなかったので自分で作っている位だ。

この世界の下着事情なんて語りたくもない。個人的にはいっそノーパンの方がましであるレベルであることは述べておこう。

後は鉄製の小さな鍋とカップ、包丁代わりの小さなナイフ。簡易のコンロ、火打ち石、先がフォークのようなスプーン、少量の干肉と固く焼いたパン。毛布も忘れずに。ほかに細々としたものをリュックサックに詰め込む。

これで用意は万端と言えるだろう。出立は明日の朝、日の出前に私はこの家を出ていく。

何故突然このような事態になったのかというと、正直自分でもちょっと考えなしだったかとも思わないでもない。いや、善は急げ、思い立ったが吉日とも言おうし……

この世界には、魔法というものがある。もちろん世間一般の人が日常的に使うという訳ではなく、限られた人間のものではある。

この村にも使える人間は一人だけだ。どちらかと言えば、攻撃性が高いものの為か冒険者になることが多いのでこの村で見かけることがないのは当然ともいえるが。

村で唯一の魔法使いも、ギルドのお婆さんのことで、主にほかのギルド窓口との念話であったり刻印魔法であるので見ることもないの

だ。刻印魔法と聞くとなかなかすごそうに聞こえるが、実際のところモンスターの落とすコインに柄を入れるものであり、ほかに訳し方の思いつかなかった私が勝手につけた和訳でもある。

ギルドの窓口になるには最低でもこの念話と刻印魔法が使えないといけないらしい。一家にじゃなくて一村に一人は魔法使いがいる計算になるそうだ。

実際に魔法使いの存在をきちんと理解したのは、たまに来る冒険者の中に魔法使いがいて目の前で実演して下さったからなのだがその辺のことは省いておく。

語りたくない事があるわけではなく、逆に全く何もなかったからだ。おおすげーで終わったし。

ここまで話しておいて何だが、結局のところ私が旅立ちを決意するきっかけになったのは一つの絵本だった。

勇者が魔王を倒して世界を救う、何の変哲もない物語。けれど、物語の終わり。魔王を倒した勇者は元の世界に帰っていった、で終わっていた。もちろん、単なる空想の物語である。別に史実を元にした話でないとニミナにも聞いたし、おじさんお婆さんにも物語だと笑われた。でも、何のきっかけもなく思いつくことなのだろうか？ いや思いつくか。私の世界の人々も妄そ・・・想像力豊かだったし。確認すると召喚術に近いものは存在するようだ。正直話が難しくて今の語学力では理解の範囲外だけれど。

まあ、とりあえずそこで私は気づいたわけだ。世界を探せば、帰る方法も見つかるかもしれない。魔法という超常現象も存在するし、現に私という異世界から来たという現象を証明するものがある。ない証明はされていない。なら探して見ようじゃないか、帰る方法というものを。

世界は広いのだ。今いる大陸でも4つの大国と20近い小国があって、ほかにも5つの大陸が・・・て多いな。規模がわからないけど地球レベルなら洒落になりませんけど。

世界を回るだけで何年かかるんだ。

ええと、とにかくいろんな国に行けば、いろんな文化もある。この国ではおとぎ話でもほかの国では宗教上信じられているかもしれないし。

ふう、と息を吹きかけて蠟燭の火を消すと、部屋の中は真っ暗になる。ここには電化製品の小さなランプの光もコチコチと響いてくる時計の音も聞こえてこない。しんと静まりかえった部屋の中で一人いると色々ごちゃごちゃ考えて止まらないなあとぼやきながらベツトに横たわる。初めてこの部屋で寝た時とはまた違ったドキドキ感と、先のわからない不安が眠気を遠ざけるけれど、それを振り払うかのように私はぎゅっと目をつむる。

おじさんとおばさんに挨拶はすませた。村の人にもそれとなく別れを告げてきた。まあ若干村の人たちは近くの村に行ってくるだけと思っっている気がするが。別れはあっさり、というよりも超軽かったし。

今生の別れかもしれないというのに。私が元から村の人間じゃなかったからかもしれないけど。もしくは若い人たちはどんどん街へと流れていく、その流れに乗ったのだと思われたのかもしれないし。おじさんは笑っていたけど、どこか寂しそうだった。息子さんも、都会に行ってしまったと言っていたから良心が痛む。私は彼らに何も返すことなく去っていくのだから。

ちなみにおばさんは大いに泣いていた。ちくちく良心が刺激されるも泣き止ませると案外ケロリとしていたのでむしろ心残りがなくなつた。

ニミナには、会うことが出来なかった。そもそもここ二週間位顔を見ていない。最後に会ったときに、少し遠出をする事になったと言っていたから仕方がない事だ。

最近ニミナは少し難しい仕事を担当させてもらえる様になったのだと喜んでいた。私と言えば喜ぶニミナのしっぽに夢中過ぎて拗ねられてしまった。・・・ああ、おじさんに伝言をお願いしたが絶対に拗ねるな。ぺたんとなった耳としっぽもかわい・・・私も随分毒されて来たな。

けど、将来はいろんな場所を巡る大商人になると息込んでいたので縁があればまた会えるんじゃないだろうか。

この世界に来て今まで出会った人の顔が浮かぶ。人生の中で言えばほんのわずかでしかないその人達との交流を思い出しながら、段々と薄れゆく意識に身を任せた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3668r/>

ある人間の受難記

2011年11月17日17時14分発行